Elonaの魔法戦士は四方世界に逝く

緋色の鎮魂歌

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

また無謀にも、新規連載してしまった。

頭の中でゴブスレがとても危険な爆弾片手にヒャッハーとか……

無謀かもしれませんが、どうか付き合っていただけたら幸いです。

目　次

プロローグ ―――――――――― 1
01　おいおい、冗談だろう ―――― 14
02　おやすみ…明日…また朗らかな芽を吹いておくれ ―――――― 27

プロローグ

あなたは大層退屈していた。

あなたがこのノースティリスの地に流れ着き幾星霜。この所のあなたは大層暇であった。

友人たちと街を更地にしてみたり、店を営んで失敗してみたり、乞食をペットにしてチキチキＴＳさせて牧場で繁殖させてみたり、信仰しているかわいい（？）神と戯れてみたり、うみみゃぁとうみゃみゃぁしてみたり、ｅｔｃｅｔｃ

兎に角、数えきれない程の事をし尽くしたあなたは、暇であった。まるで、定年退職してやることが極端に減ってしまい、燃え尽きちゃった症候群になってしまったかのような状態であった。

今も退屈しのぎにすくつに潜り、下層にて終焉狩りを行っているところである。

あなたは★《虚無の大鎌》を振る。すると、出てきていた竜の首が飛び、終焉が終わった。

やはり、つまらない。あなたは深くため息をつくだろう。やはり、この程度の刺激ではあなたを満たせない。あなたは取り出した帰還の巻物を使い、ホームへと飛ぶ。

あなたがホームに着くと、家の前に一人のゴブリンが立っていた。ゴブリンはあなたの姿を見止めるとニヒルに笑う。

彼はあなたの友人であり、同じ神を信仰する同志だ。野生の奴らと違い、彼は知的で温和だ。あなたが彼にどうかしたのかと問うと彼は言った。そろそろ１２月になるが、ノイエルに行かないかと。

１２月のノイエルでは聖夜祭が行われており、あなたは友人達とともに大いに楽しんでいた。今年もその時期が来たのだと彼は言った。それに彼はあなたが大層退屈していたことを知っていた。

あなたは大いに頷き、支度し始めた。終焉を引き起こさせるための★《ラグナロク》にとても危険な爆弾、サンドバックにその他諸々、そうしてあなたは準備を整えると、最初の相棒にしてペットの少女に後を任せ、友人とともにノイエルに向かった。

ノイエルでは既に宴が始まっていた。子供たちが雪合戦にて雪原に赤い花を咲かせ、終焉が巻き起こり、酔わせた教会のシスターを気持ちいいことしている奴らがいたりと、まさに聖夜祭に相応しい様相を呈していた。

その大元の元凶となっているのは、やはり、あなたの知り合い、友人達である。皆銘々に好き勝手なことを行っていたが、あなた達を見止めると、手を止めて集まってくる。あなたはにこやかな顔で友人たちに雪玉（手榴弾）を投げ付ける。

瞬間、爆発し、友人の一人のカオスシェイプが爆ぜる。だがしかし、彼の十三盾の前では、まったくの無傷であった。そうしていると、神官職の妖精がメテオを降らす。あなた達は回避し、場は更なる混沌と化す。終焉などは最早幼稚な前戯に過ぎず、ここからが彼らの真の殺し合（遊び）いだった。

そうしているうちに、辺り一帯が焼け野原になり、お遊びも佳境に入ったところで、友人の一人、観光客のかたつむりがある物を取り出す。それは、とても危険な爆弾、解析名を原子爆弾『Ｃａｔ，ｓ　Ｃｒａｄｌｅ』。それを取り出すと、他の友人たちも一斉に同じ爆弾を取り出し始めた。

一斉にそれを地面に置き、タイマーを起動する。期せず、今日は１２月３１日。どうか来年も良き日でありますようにだとか、来年も退屈しないで済みますようにだとか、そんなことよりもっとキチキチしたいだとか、そんなこんなで年越しカウントダウンと爆弾のカウントダウンが始まる。

10…

9…

8…

7…

6…

5…

4…

3…

2…

1…

ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴッ………

ハッピイイイイイイイイイニユウウウウウウウウウイヤアアアア

アアアアアアアアアア!!

そして、ノイエルにいくつものおおきな立雲（キノコ）が立ち上ったのだった。

どこかの空間でコロコロと四つの骰子が振られた。否、振られてしまった。

当たり目は四つとも１ｄ１００の１００。まさに大ファンブルである。

そして、それがもたらすものとは――――――。

――――新たなＭＯＤ(elona)が追加されました!!

そしてあなたは目を覚ますだろう。そしてあなたは違和感を覚える。あなたは確実に死んでいただろう。這い上がる(生き返った)のであれば、あなたのマイホームから相棒(少女)によって起こされる筈であった。それなのにあなたは目を覚ました。

疑問に思ったあなたは気を失う前の記憶を探る。朧気ながらにあなたが覚えていたのは、熱波が届く前の衝撃により吹き飛ばされ、ムーンゲートに頭から突っ込んでいくところであった。

あなたは辺りを見回す。どうやら、どこかの森の中なのだろう、木々が生い茂る森の中のぽっかりと開いた林間の草地にいるようだが、何かがおかしい。そんな違和感を感じながら、とりあえず帰還の巻物を使う。

そして、あなたは驚愕する。帰還の巻物を使用したはずなのに、効果が全く現れず、巻物が灰となって崩れ去ったのである。ここはダンジョンでもなければすくつでもない。それなのに、まったく効果が表れず、あなたは困惑と同時に好奇心をそそられた。

あなたの知らない法則が働く世界に飛ばされてしまったことにあなたは歓喜する。今までの退屈な日常を飛び出し、新たなる刺激を得ることができるかもしれない。そう思うと、あなたは居ても立っても居られないが、それでも頭の片隅で思うのは、あなたの可愛い可愛い相棒達と、友人たちの顔である。が、まあ何とかなるだろうとあなたは切り替える。そんなことより早くこの世界の探索に――――――

グサリ

あなたの背後から忍び寄った凶刃があなたを突き刺す。それは小癪で矮小でズル賢く滑稽な魔物。まるで小人の様な体格をしていながらも複数突き出された刃を受け入れたあなたは普通であれば致命の一撃（クリティカル）であった筈であり、ソレ等は醜く笑い声をあげるだろう。

それは小鬼（ゴブリン）と呼ばれる魔物である。只人（ヒューム）などを襲い、殺し、奪い、犯し、醜く生きる彼らは歓喜する。森の中でただただぽつんと無防備に立っていた只人（ヒューム）をその無防備な

背中から毒を塗った短剣で一斉に一突きしたのだから。まもなくコイツは倒れ伏すだろう、そこをほかの奴と袋叩きにすれば、今夜のメシは一層豪華なものになるに違いない。いや、もしかすれば、数日前に捕まえた新たな孕み袋を使えるかもしれない。

そんなことを考えながら、小鬼達が短剣を引き抜こうとすると、それはビクともせず、一向に抜ける気配もない。訝しんでいた一匹の小鬼が前方に移り、そしてその顔を驚愕に染めると――――――

スパン

小気味いい音と共に、その小鬼が真っ二つに断ち切れた。その小鬼は右目で左半身を、左目で右半身を見るというあり得ない体験を感じる間もなく絶命する。

「ＧＯＯＢＢＢ!?」

「ＧＯＢＢ!?」

そのあまりの光景に、一斉に後退した小鬼達。バカな、あり得ないとでも言いたげな小鬼達の方へとゆらりと人間が振り返る。いつの間にやら抜かれた片刃の剣に同胞の血を滴らせた只人に小鬼達は別の意味で恐怖を抱く。それは只人の顔が凄惨な笑みを浮かべていたからであった。

「ツッッッ!!!???GOOOGOOOBBBBBBBBBBBB!!!!???」

堪らず小鬼達は逃げ出す。アレはなんだ。あんなのは知らない!!まるで蜘蛛の子を散らすように逃げていくが――

スパン

ある小鬼は頭と胴が泣き別れになり――

スパン

ある小鬼はその躯体を十文字に断たれ――

スパン

ある小鬼は一片の無駄もなく八つ裂きにされ――

スパン

スパン
スパン

そうして出来上がったのは無残な小鬼の死体だけ。それを何故か生かされた小鬼は見届けるまでもなく一目散に逃げ走る。

あなたはそれに満足しながら、出来上がった小鬼の死体を一つ摘まみ、徐に口に運ぶだろう。

そしてあなたは嘔吐（ゲロゲロ）した。

――――不味い!!こんなものは初めてだ!!!

嘔吐して気持ち悪くなった口の中を祝福された水で濯ぐ。水を飲みながらあなたは逃げて行った小鬼の後を目で追う。あなたは最初から気づいていたのだ。小鬼に刺されることも、小鬼達の短剣が薄く紫色に濡れていたことも。あなたの友人が経営している小鬼牧場ではないにしろ、あんな知性的に動く小鬼はきっと集落があるに違いない。

あなたは★《斬鉄剣》を仕舞いながらワクワクして小鬼の後を追っていった。

あなたの異世界[四方世界]での旅は始まったばかりなのだから。

そんな姿を見ていた神々は一斉に頭を抱えた。《真実》《幻想》《死》《光》は己が振った骰子の目にどうしてぇと嘆き、それを見ていた神々はゲラゲラと笑うモノやうわぁと顔を引き攣らせるモノ等と三神三様である。

そんな中で、ある一グループの神々は顔を青くしながら後退る。そう、彼らこそ追加[Ｉｎｓｅｒｔ]されたＭＯＤ[Ｍｏｄｅｒｎｓｔａｒｔｅｒｓ]における信仰の対象。

機械のマニ
風のルルウィ
元素のイツパロトル
地のオパートス
幸運のエヘカトル
癒しのジュア
である。

かの神たちは知っていた。彼が彼の信仰する神のお気に入りであることを。彼の前ではかの神もメスであるということを。

それを知っていたからこそかの神々はそそくさとこの場から離れようとする。かの神が此処に現れる前に早く退散しなくてはと――――

「君たちかい……僕の……私の……大切なしもべを奪ったのは」

そして現れてしまった。彼の信仰する神。収穫のクミロミが。

・ｅｌｏｎａ

ローグライクＰＣゲームの一つ。基本的に何でもできる。ゲームの操作の仕方や仕様の理不尽さでゲーム自体をゴミ箱にシュートするまでがチュートリアル。

・★《〇〇〇》

ｅｌｏｎａの中で現れる固定名詞のアーティファクト。ものによってはそこそこ強

い。

・農民ゴブリン

あなたの友人の一人であり、同じ収穫のクミロミの信者。元クミロミのお気に入り、現在はあなたが現れたことで二番目となっているが、それでも信仰し続けている。ほかにもあなたの友人は幾人か存在する。

・ムーンゲート

どこにつながるかわからないどこでもドア。行先は指名できないが、だいたいはどこにでも行く。

・収穫のクミロミ

ｅｌｏｎａの中での信仰対象。あなたが信仰している神。あんなしゃべり方だが、一応男神（という設定）。しかし、あなたの前では身も心もメスになる。――――あなたはクミロミをメスにした!!

０１　おいおい、冗談だろう

走る、走る、走る、

そう、それは、恐ろしいアレから逃げるため。

なんなんだ、アレは！　一体どうしてこうなった!!

いつも通りだった筈だ。ノコノコと根城に入ってきた輩を倒し、男は喰らい、女は犯し、いつもと変わらない。そうだった筈なのに!!

アレが来た。たったそれだけで全てが壊された。配下の小鬼（ゴブリン）達は殺され、《渡り》としてやって来ていた田舎者（ホブ）や最近進化した呪術師（シャーマン）共はその真価を発揮するまでもなく粉微塵にされた。

逃げ出す統率者（リーダー）が今まで逃げきれていたのは単に運（追跡ロール失敗）がよかったからに過ぎない。そして、その運は今切れた（追跡ロール成功）。

かくて、統率者の首に凶刃が放たれた。

あなたが小鬼の追跡を始めておよそ数分、小鬼が逃げていく先にある根城だと思われる洞窟をあなたは見つけた。見張りなのだろうか、一匹の小鬼が眠たげな表情で突っ立っている。先に小鬼が血相を変えて逃げ込んだであろうに、全く警戒するそぶりも見せず、唯々突っ立っている。

気付かれるのも一興か、とあなたは考えるが、洞窟の中で何があるのか分かったものではないため、あなたはポーチの中から加速のポーションを取り出し、呷る。そして素早く武器を替える。洞窟の中ではリーチの長い★《斬鉄剣》は振るえないため、☆のついた素早さ（アーティファクト）を上げる短剣（ショート）を抜く。そしてあなたは一気に小鬼に近づき、首元に一閃を放つ。

大きな欠伸をあげた瞬間の出来事であったため、小鬼は全く反応ができず、気付いた時には喉が裂かれ、己の血が吹き出ているところであり、眼前にはそれをなしたであろうあなたが立っていた。

あなたは崩れ落ちる小鬼の脳天に短剣を突き立て、完全に絶命させる。絶命したのを

確認するとあなたは洞窟の中に入っていく。洞窟の中は生臭く、何とも言い難い臭いが充満していた。あなたは僅かに顔を歪ませると、香る臭気に耐えながら進んでいく。

洞窟の中は薄暗く、何も持たずに進むと全く身動きが取れないほど暗かったが、ダンジョンに潜っていたあなたにはなんて事はなかったようだ。洞窟の中を進むにつれ、疎らではあるが小鬼の数も増えてくる。その一匹一匹を虱潰しに且つ静かに殺していく。

臭気がだんだんと強くなり、その発生源と思わしき場所にたどり着くと、そこは小鬼達の肥溜めとなっているようだった。そんな中に、小鬼には不釣り合いな鎧の残骸があり、いくつかの人骨と思わしき残骸が散乱していた。あなたはそんな中から白色（白磁）のタグ（の等級認識票）のついた首飾りらしき物を見つける。それは、あなたの友人の一人、機械のマニの信者がそのペット達に配っていた認識票と同じようなものであった。

あなたは何かの組織の物なのであろうそれをしまい込むと、洞窟の中に幽かではあるが、小鬼とは違う声が響いたのを聞き取った。まだ生きている奴がいるのかと、あなたは最深部を目指す。

肥溜めから更に進むと、前方から明かりが漏れているのにあなたは気付く。そして、声の発生源がそこであることもわかる。あなたは壁に寄り、気付かれないように中を窺う。

中は一寸した広間となっており、いくつかの松明が明かりとして灯されている。その

中に小鬼達が様々に声をあげていた。中央部には他の小鬼達よりも身体の大きな個体や手に木の棒を持ち奇妙な面をかぶった個体がいた。
「嫌ぁ……も……ぁ」
「ア……ウア……」
そして小鬼達の中に女が二人。何れも服を剥かれ、身体の至る所に傷を作りながら、小鬼達の慰み者となっていた。女達は酷く憔悴しきっていたが、生きてはいるようだった。
あなたは、松明の位置、ゴブリン共の配置等を確認すると、そこらに落ちている小石をいくつか拾い、目を閉じる。目を再び暗闇にならすと、小石を松明に向かって投げ付けた。
「ＧＯＢＢＢ!?」
「ＧＯＡ!?」
小鬼共が困惑する声を上げるのを確認すると、あなたは別の短剣を取り出し、両手に持つと、広間に飛び込んでいった。

覚悟は、していたつもりだった。それでも、こんなことになるなんて。

森で何の変化もなく暮らしていくのに飽き飽きして、森を飛び出し、只人（ヒューム）の街で冒険者となった。同期の只人の男戦士、男斥候、女神官と一党（パーティー）を組み、小鬼狩りに来た。新人でも倒せる、私だって森で倒した事があった、小鬼狩りの依頼（クエスト）を受けた。冒険者なんだから、もっと未知を探索するのかと思っていたのに、少しガッカリはしたが、等級を上げていけばいずれはできるであろうと、依頼をこなす筈であった。

侮っていた、驕っていた。たかが小鬼であると。巣の洞窟に入り、一番最初に男斥候がやられた。陰に隠れていた田舎者の小鬼に棍棒で脳天からかち割られていた。男戦士が田舎者の相手をしているうちに、後ろから小鬼の増援が迫ってきた。女神官が戦士の援護に私が弓と短剣で相手している間に戦士が抜かれ、私と女神官は小鬼達に飲み込まれた。

「うぁ……だ、れか……」

普段は全然信じてなどいないこの世の外から見ているといわれている居るかも判らない神々に祈ってしまう。普段なら全く下らないモノと思っていた神に縋ってしまう。そんな都合いい展開など起こりはしないのに、それでもと縋り祈（幸運（ローール））ってしまう。

しかして、それは、気まぐれに――――

若い芽を摘むまいとした(この先の展開を予想した)――――

収穫のクミロミ(幸運ローム)によって拾われる(決定的成功)ことになる。

「ＧＯＢＢＢ!?」

「ＧＯＡ!?」

突如として飛来した何かによって、松明の明かりが掻き消される。私たちを犯していた小鬼達が怯み、何事かとあわただしく叫んでいる中、何かを裂く音と小鬼の悲鳴が響き渡る。

「ＧＡＡＡ!?」

「ＧＵＧＩ!??」

瞬間に広まっていく猛烈な血の匂い。木霊する小鬼達の悲鳴。何が起こっているの

かわからない小鬼達は為すすべなく倒されていく。そんな中、呪術師が《火球》の魔法を無差別に放つ。幾つかが小鬼達に当たり、炎が辺りを照らすと、周囲には小鬼達の残骸と田舎者の死体が転がっていた。

　そして、それ等を成したであろう人物が、呪術師の前に立っていた。全身を鎧で包み、両手に形の違う短剣を持っているその人物を。小鬼の血飛沫を全く付けていない鎧姿とその風格はまるで、王に仕える近衛騎士のようであった。

「!??　G――――」

　そして、呪術師が次の詠唱を口ずさむ前に短剣が振られ、呪術師の首が刎ねられる。呆気なく、決着はついた。

　群れの長であった統率者はその惨状を見て逃げ出したが、広間から出る寸前で放たれた矢に頭を吹き飛ばされ、倒れ伏した。それを行ったであろう人物は、いつの間にか取り出した波動を放つ弓が握られており、その弦が微妙に震えていた。

「……あ……」

　その人が、弓を背負いこちらにやってくる。生きているか？　そう聞かれた時、安堵からか疲労からか、私は意識を暗闇の中へ落した。

★異形の森の弓

意識を失った耳長の女性の息が落ち着いているのに、あなたは安堵する。せっかく助けたのに死んでもらっては困る。そう思いながらあなたは布きれとお湯を取り出し、二人の身体を拭き清める。流石に小鬼共の汚濁で穢されたままでは酷だろうとあなたは思う。粗方拭き清めると、あなたは偶々売り忘れていた布製の法衣を二つ取り出し、彼女らに着せる。広間に落ちていた先程と同じ認識票を拾い上げると、二人の女性を抱え、外へと出る。

外に出ると日が陰り始めていた。早めにこの森を抜けねばと思ったあなたの目の前に荷車がぽつんと置かれていた。それはあなたがあちらの世界で使っていたものであった。

――――その位しか、支援できないけど……頑張ってね……

突如飛来した啓示(電波)にあなたは歓喜し、祈りを奉げる。今すぐにでも、祭壇と像を設置し、野菜を作って奉げたいところだが、こんなところでは育ちそうもない。あなたは精

一杯の祈りを奉げると、二人を荷台に寝かせ、荷車を引く。カラカラと子気味いい音と共に荷車は動き始め、進んでいく。あなたが《魔法の地図》を唱えると、頭の中に辺りの地形が映し出される。このまままっすぐ進めば森から出られそうだ、そう思ったあなたは彼女らが起きぬようにゆっくりと動き始めたのだった。

あなたが森を抜けた頃には辺りは暗くなっており、今日は野営するかとあなたは思う。荷車を止め、荷台からたき火と鍋を取り出して、地面に設置する。たき火に火を灯し、鍋に祝福された水とイーモとグリーンピースを入れ、火に翳す。ゆっくり、火を通すと鍋の中にイーモとグリーンピースのスープ（創作）が出来上がる。

「……う……ここ、は……」

そうこうしている内に先程の耳長の女が目を覚ます。荷台からゆっくりと顔を出す彼女に、大事はないか、とあなたは問う。

「貴方は……そう、だったわね…助けてくれて、ありがとう」

あなたを見て、ビクリと身を竦ませたが、あなたの姿に安堵したのだろう、感謝の言葉を述べた。しかし、彼女の瞳は暗いままだった。簡単だが食事を用意したのでどうだ、とあなたが問うと彼女は荷台から降り、たき火に寄ってきた。

「ありがとう…頂くわ」

スープを注いだ椀と匙をあなたから受け取ると、ゆっくりと食べ始めた。彼女が食べ始めたのにならい、あなたもスープを食べ始める。イーモの優しい甘さとグリーンピースの甘さが少し入れた塩により更に引き立つ。

まあ、有り合わせで短時間で作ったものであるし、こんなものだろうと、あなたが思っていると、彼女の瞳からポロポロと雫が落ちる。それでも、彼女はスープを口に運ぶ。

矮小な小鬼共に凌辱の限りを尽くされたのだ、無理もない、とあなたは思う。だが、そんな絶望的な状況を経ても、心折れず懸命に生きようとする彼女なら、何かを為せるに違いない、とあなたは思う。

彼女の涙に気付かない振りをして、食事の時間は過ぎていく。

「…ご馳走さま、美味しかったわ」

そう言って差し出された椀を受け取る時には、彼女の表情はほんの少しではあるが和

らいでいた。アイラインが赤くなっているが、気にしないようにする。
「あなたは…冒険者、じゃ…ない、のよね」
彼女の言葉にそうだ、とあなたは首肯する。あなたは自分が旅の者であると言い、ここより遥か彼方から来た者である、と言った。貴方達を助けたのも、森を抜けるときに、偶然発見したからである、とも言った。
「そう……何度も言うようだけれど…ありがとう、本当に助かったわ……他の、皆は…」
わかっている筈なのに聞かずにはいられない。そう言う彼女にあなたは静かに首を降る。あの場で生きて助け出せたのは、貴方達二人だけだった、とあなたは取り出した二つの認識票を見せながら言う。

判りきっていた事だった。そう思いながらも、彼等の認識票を彼から受け取ると、涙が溢れてきた。
「…皆で、旅をしよう、って…言ってた、のに……色んな、未知に挑もう、って言ってたのに……ッ」

枯れた筈の涙が、止めどなく溢れる。流しきった筈なのに、それでも涙は止まらない。彼はそんな私に気を使ったのか、なにも言わず、ただ静かに受け止めてくれていた。

空に輝く無数の星々の瞬きと二つの月だけが、ただ静かに彼らを見つめていた。

・☆《〇〇〇》

一般的なアーティファクト。大体は名前がおかしい。物によっては★（固有名称付アーティファクト）付きの物より、性能がいいこともある。ただし、名前（ｒｙ

・波動を放つ弓（異形の森の弓）

異形の森のロミアスが序盤で所持しているアーティファクト。彼でなくとも、ランダムでドロップするが、あなたは序盤で手に入れた。つまり、そういうこと。

・電波

この四方世界では啓示と呼ばれている。しかし、貴方の世界ではよく流れている。

「うっみゅーうみゅうみゅ」

「もっと！もっと！」
「死んじゃったよ！たよ！」
「逝け！逝け！フハハハッ！」
「フハハハ！」
「フハーン！」

・荷車

物を乗せられる。補強が可能であなたの荷車は結構な重量を耐えることが出来る。
しかし、それをあなたが引いているのか馬にでも引かせているのかは、全くの謎。

02　おやすみ…明日…また朗らかな芽を吹いておくれ

ガタゴト、ガタゴト

あなたは荷車を引きながらゆっくりと草原を進む。あれから、泣き疲れて眠った耳長を荷台に寝かせ、たき火の前で寝ずの番を引き受けていたあなたは空が白み始めたのを見ると移動を始める。彼女らは未だ起きてはこない。無理もない、とあなたは思うだろう。あんなことがあった後だ、いくら吐き出したからと言っても、精神的疲労も肉体的疲労も回復しきっていないのだ。

《魔法の地図》によってこの先に道があることはわかったので、彼女らを起こさないように荷車を引きながら進む。ここまでくる道中、何の敵対勢力にも襲われなかったので、安堵する反面残念でもある。どうせなら盗賊団の一つや二つ出て来てもいいものではないかとあなたは思う。そうすれば、この世界の人類の大まかなレベルが知れたと思うのだが、と残念に思う。

そんなこんなで歩みを進めていると、道が見えてくる。道につき、さてどちらに進めばいいかとあなたが考えていると、道の先から何やらある程度の人数の集団がやってく

る。近づいてきた姿を見るに、隊商のような集団であるとあなたは思う。
「よう。あんた、こんなとこで何やってんだ？」
隊商の護衛として先頭を歩いていた重装備の男戦士があなたに話しかけてくる。気さくに話しかけてくる彼ではあるが、その気配や瞳は一分の隙もなく警戒しているのが判る。それに隊商の護衛に就いている彼の一党（パーティー）の全員が周囲に気を配りながらも、あなたに対しての警戒も全く疎かになっていないことから、この一党がかなり高位の一党なのではないかとあなたは思う。
そんな彼らに警戒されている事について、このまま警戒されていてもいいか、と思うあなたではあったが、今荷車で眠っている彼女らのためにも一応、警戒を解いておこう。
あなたは、自身が旅の者であり、小鬼（ゴブリン）共の巣で女性二名を救出したと、また今は町に向かっているのだとあなたは言った。
「ッ！…そうか。彼女らを助けてくれたこと、礼を言う…確かに、見たことがある、確かに十日ほど前にギルドで彼らを見たことがある。俺たちがこの隊商の護衛に出る直前だった筈だ」
「確かに、見たことあるね。この耳長の弓手、最近新しくできた白磁の男戦士の一党だった筈ね……他の奴はどうなったね」
重装戦士の言葉に、様子を窺いに来た呪術師と思しき男があなたに聞く。あなたは懐

から取り出した白磁の認識票を彼らの前に差し出す。彼らはそれだけで察したのだろう、一言、そうか、と呟くと目を伏せた。

「彼らを助けられなかったのは惜しかったが、それでも彼女らだけでも助けられたのは僥倖だ。ギルドに代わり礼を言う」

重装戦士の礼をあなたは受け取り、彼女らを町まで運ぶために隊商に同行してもいいだろうか、とあなたは問う。重装戦士と隊商の長の了承を得て、隊商に同行する運びとなった。隊商の最後尾につき、隊商の歩みに合わせて街に向かっていく。時折、数匹の魔物が散発的に襲ってくるが、一党の活躍により、全くの脅威となっていなかった。

あなたは、安心する心の何処かで退屈もしている。散発的な魔物の襲撃はあっても、あなたの目から見たら所詮最弱（ブチ級）。せめてちょっと強（グリズリー級）いくらいの敵が出てきたり、盗賊団の一つや二つ出てきても構わなかったのにとも思う。まあ、それにしても安全な行路であるのならば、何も問題はないのだが。

ここはやはり、あなたの住（ノース）んでいた世界（ティリス）ではないのだと、改めて実感させられるのだった。

それから、凡そ五時間ほど歩き、あなたと隊商一行は街にたどり着くことができた。そこは辺境の街といった様子ではあるが、昼過ぎであることも関係するのか、なかなかの活気に満ちていた。重装戦士が隊商の長と話している間、あなたは先程の男呪術師から彼女らをどうすればいいのかを聞いていた。

「一応二人とも地母神の神殿に連れて行けばいいと思うね。地母神の神殿は彼らの教義として『守り、癒し、救え』の教えを守ってるね。傷ついた彼女らも回復するまでの面倒は観ておいてくれるね」

それに何より、あの女神官は地母神の神殿出身ね、と男呪術師が言う。どうやらこの世界（四方世界）にも土着の信仰があるらしい。そこの神殿に連れて行けばいいのか、とあなたは言うと呪術師は頷く。あなたたちが話していると、重装戦士が話し終わったのか、あなた達の方へとやってきた。

「地母神の神殿には俺たちも同行しよう。一応、これでも翠玉等級の俺達が着いていったほうが、何かと説明もつくだろうしな」

その申し出にありがたい、とあなたは言う。この世界で翠玉等級なる位がどれ程のものなのかは判りかねるが、彼らの武具や立ち振る舞いを見るにそこそこの地位があるも

のと考えていいと思ったからだ。

早速あなた達はその神殿に向けて移動する。彼ら一党は重装戦士、呪術師、軽戦士、拳闘家といった中々の前衛的な一党である。

さて、それはさておき、数分ほど荷車を引くと、目的の地母神の神殿が見えてきた。軽く柵に囲まれた神殿は、外壁こそ少し傷んではいたが、丁寧に手入れが行き届いた神殿であり、その信仰の厚さが伺えた。そして、神殿の前に荷車を止め、重装戦士の一党に連れられ神殿の中に入っていく。

神殿の中は手入れが行き届いており、幾人かの神父やシスターらしき人物が見受けられた。その最奥にはおそらく地母神であろう像とそれに祈りを奉げる司祭がいた。司祭はあなた達に気づいたのか、ゆっくりとこちらに振り返った。

「おお、重装戦士殿、それに一党の皆様。よくお戻りになられた。本日は如何なされた」

「司祭殿、この御仁が小鬼共に辱めを受けていた女冒険者たちを救い出したのだが、彼女らは憔悴していてな。それにその内の一人は地母神の出らしいのでな。ここにおいてはくれまいか頼みに来たのだ」

重装戦士の説明を受けたあなたが会釈をすると、司祭は微笑み頷いた。

「もちろんですとも。傷付いた者を守り、癒し、救うのは我らの教義です。それに、私共の出の神官を救って下さったとなれば無碍にはできますまい」

司祭は、傍にいた神父たちに彼女らを病室に運ぶように指示する。神父たちが動き出すと重装戦士が頭を下げる。

「感謝する、司祭殿。　彼女等が一日でも早く元の生活に戻れるよう願っている」

「私どももそう願うばかりですな」

そう言って重装戦士たちは離れていく。それを見てあなたは司祭に近づいていき懐から金塊（鑑定済み　本物）を渡す。司祭は驚いたように受け取れないというが、あなたはそれを押し付ける。あなたとて一柱（収穫のクミロミ）を信仰する信奉者である。これは、この教会への寄付と彼女らへの援助という形で受け取ってほしい、と押し付けると、司祭は困ったように笑い受け取ってくれた。

「旅の旦那。すまないが、ギルドまで一緒についてきてくれないか？　我々だけでは事情の説明がな」

外で待っていた重装戦士の言葉にあなたは頷く。あなたもこの世界のギルドとやらに行ってみたいと思っていたところであった。ついでなら、冒険者として登録するのもいいかもしれないと思っているあなたに断る理由なんかない。

一党とともに移動していくと、街の中でもそこそこ大きな建物に着く。中に入ると、幾人かの冒険者らしき者たちが思い思いの時間を過ごしている。ギルドのほかに酒場が併設されているのか、昼間から酒を飲む者もいれば、武器や道具の手入れをしている者、単純に話し合っている者など様々である。

重装戦士が冒険者をかき分け中に進んでいくと、周囲の冒険者が彼らに話しかけている。その中でも、あなたを目にした者たちは訝し気な視線を送ってくるが、彼らに続き奥に進んでいく。

「あっ、重装戦士さん！おかえりなさい!!　お戻りになられたということは、ご依頼（クエスト）達成の報告ですか？」

カウンターに控えていた受付嬢らしき栗色の髪の女性が重装戦士の姿を見止め、声をかけてくる。

「そうだ、隊商の護衛依頼完了を報告しに来た。これが証明書だ、確認してほしい」

「はい、承りました！　……確かに、ご本人様の署名ですね、こちらがご依頼達成の報酬になります！ご確認ください！　それで、そちらの方は一体どういったご用件ですか？」

重装戦士と受け答えをしていた受付嬢があなたっを見止めると、重装戦士に問う。重装戦士は少し渋い顔になると、事情を説明する。

「彼は旅の御仁らしいのだが、小鬼の巣に囚われていた白磁等級の女冒険者二名を救出したそうなのだ」
「それは本当ですか!!?　確かに、十日程前に小鬼討伐の依頼を受けた白磁等級の冒険者一党が未だ戻っていませんでした。……それで、女冒険者以外の方たちは」
受付嬢の言葉に、あなたは懐から取り出した二つの白磁等級の認識票をカウンターに置く。認識票の一部がひしゃげたり血痕が付いていたのを確認すると、受付嬢は沈痛な表情を浮かべる。
「…そうですか、それでも、認識票の回収と、彼女らの救出を行って下さり、ありがとうございます。　それで、巣の方にはどれ程の小鬼が残っていますでしょうか？まだそれなりに――――」
受付嬢が確認を問う前にあなたは言った。皆殺しにした、と。
「全滅、ですか？　すみませんが、巣の規模などはどの程度だったのですか？」
困惑する受付嬢に、あなたは答えた。
巣の中に居たのは凡そ三十七匹。その内、武器持ちが十数匹。また、体格の二回りほど大きな個体が一匹と杖持ちの術使いが一匹、それに、やたら着飾っていた統率者らしき個体が一匹。
あなたが巣の内情などを説明していると、周囲の、いや、ギルド内全体がざわついて

いた。
「田舎者(ホブ)に呪術師(シャーマン)がいる群れだと…」
「三十七匹の統率者(リーダー)付きの群れとか、青玉等級の依頼だぞ」
「…ええと、しょ、少々お待ちください!!」
　周囲のざわつく冒険者を他所に、受付嬢はカウンターの奥に引っ込んでいく。ザワザワとギルド内がざわついていること数分、奥から現れたのは、先程の受付嬢と身形からおそらくここの長であろう人物、それに赤褐色の髪を持つ女性であった。
「すまない、私はここのギルドを取り仕切っている者だ。貴殿の報告と翠玉等級重装戦士の報告を受けてきた。　貴殿からの報告を疑う訳ではないのだが、もう一度言って貰って良いだろうか」
　ギルド長の言葉にあなたはもう一度同じ報告を行う。すべてを話し終えた時、ギルド長は傍に居た赤褐色の女性に問うた。
「《看破(センスライ)》の結果はどうだ」
「…嘘を言っている反応はありません。しいて言うなら、場所がどの辺りかわかっていないので、そこで少し反応した位です」
「……そうか」
《看破(センスライ)》があなたはどういうモノか知らないが、おそらくうそ発見器の様なものなのだろ

うと、あなたは思う。魔導書の様なもので存在するのであれば是非とも欲しいものだ。
「報酬に関しては、依頼に設定されていた報酬だけになるが、それでもよろしいか？」
あなたはそれで構わない、と言う。小鬼の巣を見つけたのも、彼女らを助けたのも偶然だったのだから。そうこうしている内に、先程の受付嬢が報酬の入っているであろう袋を持ってきた。当然だが、袋はとても軽い。
「それでだ、旅の御方。あなたはこの後どうなされるおつもりか？」
ギルド長のなにかを探る様な声音の問いかけに、あなたは答えた。自分は旅する者である、ここへ流れ着いたのも何かの縁あってのことかもしれないので、しばらくはこのあたりにいる、と。そういうと、ギルド長は言葉を選ぶように言った。
「そうか……できることであるのなら、あなたにはここで冒険者となってほしい、と思っている」
冒険者。つまり、冒険者ギルドに所属しろということか、とあなたは問う。ギルド長はそうだ、と頷く。あなた自身冒険者となってみるのも悪くはないとは思っている。しかし、先程の話の中で白磁や青玉や翠玉などといった等級の話が出るに、等級の上がるにつれて自分の思ったようにはいかないことも多くなるのではないかと、あなたは面倒くさくなることだろうとも思う。
あなたは、ギルド長に、旅の者である自分が何時かはこの地を離れるつもりであるこ

とを告げ、その間でもいいのであれば、冒険者になることも吝かではない、と言った。
実際、あなたがこの世界で生きていくためにも、先立つ物は必要であるし、そうでなくとも、身分証くらいにはなるであろうと、単にそういった魂胆であった。
「そうか！　その間だけでも構わない、ありがとう」
ホッ、としたようなギルド長が受付嬢に指示すると、受付嬢は一枚の紙を取り出した。
「これは冒険者登録に必要な冒険記録用紙になります。ここに必要事項の記入をしていただくのですが、文字の読み書きはできますか？」
受付嬢の言葉に、あなたは首を横に振る。代筆になるが、それでもよろしいですか、という言葉にあなたは頷き、料金は先程の報酬から引いてもらってくれ、と言った。
「では、代筆いたしますので、お答えくださいね。まずは…」
受付嬢の質問にあなたは答える。歳などすでにいくら経っているのか判ってはいないが、それ以外は何となく答えていっている。
「では、最後に、職業は如何なされますか？」
受付嬢の言葉にあなたは自身の職業である、魔法戦士と答えた。魔法戦士という言葉に、ギルド内が少しざわつく。
「魔法戦士、ですか？　魔術と剣技を使いこなせると、いうことですか？」
あなたは受付嬢の言葉に頷いた。実際、剣だけでなく、斧や鎌も使えるので、もしか

すれば、万器使（オールラウンダー）いになるのかもしれないが、魔法戦士という言葉でこれだけ反応しているのであれば、言わないほうがいいのであろうと、あなたはそれ以上は何も言わなかった。

「わかりました。……これにて、冒険者登録は完了となりました。こちらが、冒険者の身分証である第十位の白磁等級身分証です。何かあった時にも必要ですから、無くさないで下さいね」

冒険記録用紙の記入を終えたあなたは、白磁等級の身分証を手に入れた。あなたは、ついいつもの癖で無意識化で《鑑定の魔法》を使用する。

――――☆祝福された来訪者の証明証《白磁の等級認識票》

なんと、アーティファクトである。それは、鋼でできており、あなたに白磁等級の身分を授けるものであり、言語理解の能力を授けるものであった。あなたはそんなものが周りの人にもついているのかと思い、あなたの生来の収集癖がわずかながらに刺激されたのも、また事実である。

そんなことはさておき、あなたはそれを身に着ける。これで、この世界の一応の身分証得たあなたはこれ以上、何かすることはないのかと受付嬢に問う。受付嬢の首肯を見

たあなたは重装戦士の一党に二三事あいさつなどを済ませるとギルドを出て行ったのだった。

「……いったい何者なんだ、彼は」

ギルド長の言葉はこの中の全ての者の心を代弁した物であり、紡がれた言葉はギルド内に溶けていった。

・重装戦士の一党

あなたと出会った翠玉等級の一党。その実力は紅玉等級に届くものであり、直に昇格されるであろうと目されている。メンバーは只人の重装戦士を筆頭に只人の男呪術師、女軽戦士、男拳闘家となっている。

・プチ級

ｅｌｏｎａの中でのモンスター集団の脅威度。一番弱い脅威であるが、油断しているとファンぶって死ぬこともある。

・☆祝福された来訪者の証明証《白磁の等級認識票》

あなたのために収穫のクミロミが直々に祝福（弄くった）した白磁等級の身分証。他の者からは普通の白磁の身分証に見える。

――それは鋼でできている。
――それはＰＶを０上げ、ＤＶを０上げる。
――それはあなたにこの世界の言語理解を授ける。